

こんにちは

2020 Vol.28

CONTENTS

新任教員挨拶	2
新任事務局員挨拶	3
地域一丸となって取り組もう新型コロナウイルス感染症予防	4
・新型コロナウイルス感染症対策～医療現場の現状～ (感染管理認定看護師教育課程修了生の実践)	
・新しい生活様式を取り入れて、with コロナの時代を乗り越えよう	
死産を経験した女性へのこころの支援事業	5
学食だより	6
図書館だより	6
卒業生からのメッセージ	7
サークル紹介 (和太鼓サークル、ダンスサークル)	8



入学者宣誓 (ソーシャルディスタンスの確保など、感染症対策下での入学式)



満開の桜と校舎 (自宅学習当時の様子)



キャンパス風景 (対面授業再開後)

新任教員挨拶

普遍分野 特任教授 佐藤 信人

今年4月に着任いたしました。厚生労働省で老人福祉計画官、介護支援専門官（ケアマネジメント）等を勤め、主に地域福祉、高齢者福祉、介護制度系の仕事をしてきました。退官後は都内の大学・大学院で教鞭を執ったのち、認知症介護研究・研修センターで専門人材を育成してきました。本学の教育理念である「生命の尊厳を基盤にした豊かな人間性を育成する」を踏まえ、地域共生、地域包括ケアの推進に向けた多職種連携に果たす看護職の役割等を皆様と共に創造してまいりたいと考えています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

ときに、現状は世界中が新型コロナウイルスの惨禍に覆われています。日々悲嘆に押しつぶされそうな日常が続きますが、気持ちが萎縮して青春に与えられた創造性を失うことがあってはなりません。若い人たちは未来です。このご挨拶が掲載される頃にはウイルス禍が収束しキャンパス内が明るく希望に満ちていることを心から願っております。



専門分野（成人看護学）助手 川西 幸広

4年前に大阪府から宮崎県へ移住してきました。とても新鮮な空気と広い空を見上げ、毎日のように感動しています。これまで精神科・整形外科脳外科・ICUで臨床経験を積み、その後、看護専門学校で成人看護学領域において学生指導に携わりました。

2020年はナース生誕200年となるキャンペーンであるNursing Nowの最終の年です。これは看護職への関心を深め、地位を向上することを目的とした世界的なキャンペーンです。しかし、皮肉にも新型コロナウイルスの蔓延により看護職に注目が集まり世界中で称えられるようになりました。私自身、臨床で必死に働いていたころ、ひたすらに疲労感と無力感に苛まれたことを思い出します。看護のもつ力は目に見えづらく分かりにくいものです。しかし絶対になくってはならない存在であることも確かです。看護とは何かという疑問を持ち続け、学生さんと共に考えていけたらと思います。

また、私は「躰くのは前に進んでいる証拠」という言葉が好きです。看護師になるには大きな壁がたくさんあります。苦難を乗り越えた先にある看護の楽しさに出会うことができるように、起きている現象に意味づけしながら学生さんをサポートしたいと思います。

どうぞよろしくお願い申し上げます。



新任事務局員挨拶

大 畑 佳 代

私は今回二回目の看護大学勤務になります。一度目は平成9年開学の年に看護大学事務局に赴任し、5年間勤務しました。当時は、看護大学前に広がるまなび野の住宅地にもまだ家はまばらで、大学勤務になった私たちも、何から手を付ければいいのか全く分からない状況でした。他の大学から学び、皆で知恵を出し合いながら一つ一つ進めていったことが思い出されます。

今回、看護大学に戻ってきて一番感じたことは、大学を運営していく上での規程が整備され、組織が整い、さまざまな側面から大学の教育活動や研究活動の充実が図られていたことです。

今年は、新型コロナウイルスの関係でさまざまなことが計画通りに進まず、残念な面も多くありますが、早く以前のような日常が戻り、学生の皆さんが充実した学生生活を送れるようになることを願うばかりです。事務局から微力ながら力になれるよう頑張ります。



川 野 洋 之

4月から事務局の教務学生担当に配属されました川野洋之と申します。

私は、平成15年に宮崎県職員として採用され、福祉保健課に配属されました。当時は、仕事をする中で看護大学の情報をよく耳にしていたのですが、15年の時を経て、今回、事務局職員として働くことになりました。

看護大学に来て最初に感じたことは、環境の素晴らしさでした。4月以降、新型コロナウイルス感染症により、学内行事の見直しなど様々な対応に追われ、慌ただしい毎日を送っていますが、時折、多くの樹木や草花に囲まれた外の景色を眺め、癒やされているところです。学生の皆さんにとっても、授業開始の遅れや大学祭が中止となるなど大きな影響が生じていますが、安心して勉学に励むとともに、充実したキャンパスライフを送ることができるよう尽力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



新型コロナウイルス感染症対策 ～医療現場の現状～

独立行政法人国立病院機構 都城医療センター

感染管理認定看護師 福丸 和也

(宮崎県立看護大学 感染管理認定看護師教育課程 平成26年度修了、平成16年度学部卒業)

私は感染管理認定看護師として、パンデミック（世界的な感染症の流行）を引き起こしている新型コロナウイルス感染症に対する院内の感染対策に携わっています。

どこの医療現場においても感染から身を守る物資（マスクなど）の確保が難しい中、未知のウイルス感染に対し、あらゆる状況を予測した対応が求められています。患者さんには、入院時に検温や問診を行い、面会制限など感染リスクを避けるための制限を行っています。不安を抱えながら療養生活を送る患者さんの思いに対応しながら、対策の必要性を説明し、協力をいただいています。職員に対しては、感染対策の基本である手指衛生や環境整備の徹底を指導し、対応フローの整備等を行っています。院内や地域で多数の感染者が発生し、医療を必要とする方に十分な医療が提供できなくなることがないように、感染対策を徹底し日々危機感をもって対応を続けている状況です。

現在（2020年5月）、国内では新規感染者数が減少し始めていますが、ワクチンや有効な治療法が確立し普及するまでこの状況は続きます。地域の方々一人ひとりが職場や学校、家庭で感染から身を守る行動を継続することが重要になってきます。

これからも、病院内や地域に貢献できるように感染管理の知識や技術を活かし、この困難な状況を患者さんや職員、地域の皆さんの協力をいただきながら、乗り越えたいと思います。



院内での研修風景



職員指導の様子（右端が福丸さん）

新しい生活様式を取り入れて、 with コロナ の時代を乗り越えよう

感染管理認定看護師教育課程 主任教員、准教授 邊 木 園 幸

2020年1月7日に新型コロナウイルスによる肺炎が武漢で発生していることをWHOが公表してから、2ヶ月あまりのうちに世界的な大流行となりました。国内においても感染者数が増加し、4月7日の政府による緊急事態宣言によって一気に緊張が高まりました。国民みんなの努力により感染者数は減少しましたが、今後も国内での大規模流行が起こる可能性はゼロではありません。ワクチンや治療薬がない今は、3密（密集、密接、密閉）を避ける生活様式に適応していくことが予防策といえるのではないのでしょうか。大学内においても、3密を避ける学習環境の整備に取り組み、学生・教職員一丸となって感染予防に取り組むことを前提に5月中旬から対面授業を開始しました。私たち一人一人にできることを考えながら日々の生活で感染予防に取り組み、この難局の克服を切に願います。

死産を経験した女性へのこころの支援事業

講師 橋口 奈穂美

赤ちゃんの死は、女性にとって悲しく・辛いきごとです。宮崎県では、1年に200名以上の方が死産を体験されています。死産率（自然死産率＋人工死産率）も常に全国平均より高く、死産数を減らすこと、同時に、死産を経験された女性の悲しみを癒すこころの支援を行うことが、県内の周産期施設で働く医療者の課題と言えます。

今回、私たちは、周産期グリーフケアの支援力向上に貢献したいと考え、県内で死産後の女性のこころの支援を行うセルフケアグループ「宮崎天使ママの会」と共に、周産期グリーフケア研修会を開催しました。グリーフケアとは、大事な子どもを亡くし喪失と立ち直りの思いとの間で心身が揺れている状態にあるとき、そばに寄り添い悲嘆のプロセスを助けるよう支援することです。

研修会に先立ち、県内で死産を経験された女性8名の方にインタビューを行い、出産前後に医療機関で受けたケアと望む支援について直接声を聴かせて頂き、プログラムに反映しました。

研修会には、県内の周産期母子医療センター7施設を含む看護職の方、看護学生、そして当事者の方など56名の参加がありました。参加者は、プログラムの中で紹介された死産を経験した母親・家族の生の声・写真から、自身や自施設の看護実践を振り返る機会となり、亡くなった子どもの人としての尊厳を保ちながら親になる支援をしていきたいと気持ちが高まっていました。また、研修2か月後に参加した看護者の方々に行ったインタビューでは、これまで何と声をかけてよいか戸惑っていたが気持ちに寄り添えた声かけができるようになったや、赤ちゃんに接する中で親とのコミュニケーションが進んだ、グリーフケアにチームで取り組むようになったなどの変化が語られました。

死産後の良質なケアは、女性のこころが救われるだけでなく、次の妊娠にもつながることや何よりもいのちの意味について、経験者と医療者が深く考えることができる瞬間であると考えます。県内では、人工死産が多いことも課題となっています。死産後のグリーフケアは、医療者にとっても心理的負担が大きいことですが、ケアの力は、人のこころを変えることを信じ、各施設においてケアの質を高める実践が続いていくよう願っています。

周産期グリーフケア研修のプログラム

- (1) 周産期グリーフケアの基本とケアを根付かせるためのチームづくりについての講演。

講師：大蔵珠己氏（助産師）

地方独立行政法人 大阪市民病院機構
大阪市立総合医療センター
総合周産期母子医療センター

- (2) 県内において死産で我が子を亡くした女性が受けたグリーフケアと望む支援（体験者の声）についての調査研究発表。

発表者：加藤章子氏

（本学、母性看護学准教授2019年度）

- (3) 「宮崎天使ママの会」（ゆりかごの活動）活動報告。

報告者：黒木啓子氏 宮崎天使ママの会代表

- (4) 研修参加施設の周産期グリーフケアの現状の発表。

- (5) 周産期グリーフケアを根付かせるために自施設で行えることを出し合い、標準的な周産期グリーフケア作成をめざすワークショップを実施。



大蔵珠己先生の講義



ワークショップの様子

学食だより

株式会社ホーユー 調理責任者 中嶋 好孝

平素より看護大食堂をご利用頂き誠に有り難うございます。

今回、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の為、営業を自粛しておりましたが、5月13日に営業を再開する事になりました。スタッフ一同、皆様と会える日を楽しみにしておりました。

今後も可能な衛生対策を行い、皆様に安心していただける様に努力致します。

今後とも、宜しくお願い申し上げます。



日替わりランチと限定メニュー



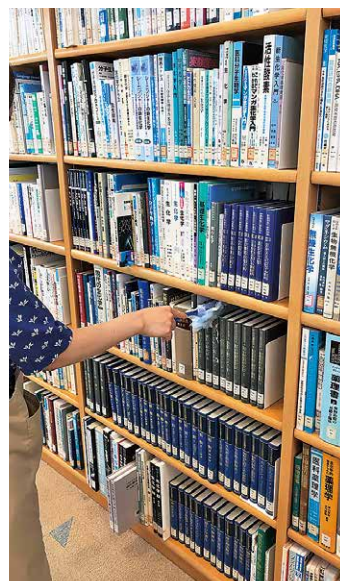
おすすめの一品

図書館だより

附属図書館職員 小川 貴子

こんにちは、附属図書館です。令和2年度は、図書館でも、新型コロナウイルス感染症対策でスタートしました。不要不急の外出自粛が求められる中、大幅な利用制限をさせていただき、日頃から当館をご利用いただいていた方々には、大変なご迷惑をおかけしたところです。（この原稿は4月末に書いておりますが、皆さんのお手元に届く頃には、コロナが終息していればと願っております。）

当館では、この利用制限の期間に、通常の開館時には難しい本の移動作業を行いました。本が増えて取り出すのが難しかった書架の棚を一棚増やし、重複した本を抜き取ることで書架に余裕が生まれました。また、抜き取った本は、集密書架（旧版、重複図書が置いてある場所）に移すのですが、そちらも余裕が無い状態だったため、同じように棚を増やし、場所を詰めるなどしてスペースを確保しました。重労働でしたが、日頃使わない筋肉を動かし良い運動になりました。この移動に伴い、館内の表示も見直しました。大規模な移動を行いましたので、本が見つからないなどございましたら、司書にお声かけください。



本の移動作業後の様子

卒業生からのメッセージ

「はじめての育児を体感しながらみてきたこと」

宮崎県立宮崎病院 眞 方 夏 美 さん（平成24年度卒業）

私は看護大学や産婦人科病棟での勤務を経て、現在は育児休暇をすごしています。これまで、妊娠・出産・育児に直面している多くの対象との関わりの中で、“立場の変換”や“追体験”を意識して看護に励んできたつもりでした。しかし、いざ自分の育児が始まると、予想外の連続にあたふたし、“助産師なのに”と自分を責め、苦しく感じるときもありました。その度に、とことん自分自身と向き合い、これまでの価値観や考え方の癖などに向き合ってきました。人と違って当たり前である“個”を再認識し、育児書とにらめっこしながら答え探しをしていた私から、自分や子どもの声に耳を傾け、感じ取ろうとする私へ変化してきたように思います。

よく“子育ては己育て”と言われるますが、己（個）をみつめる子育ては看護にも共通すると改めて感じています。妊娠・出産・育児を体感して学んだことを大切に、私だからできる看護とは？や、己（個）を尊重した“らくに産まれてらくに育つ”にはどうしたらよいかを模索し、復帰後の支援につなげていきたいと考えています。自分の成長や対象を見つめる視点がどのように変化したかが知れると思うと復帰が楽しみです。子どもとじっくり向き合える時間が残りわずかであると思うと、子どもと過ごせる今をより丁寧に過ごしていきたいと感じているところです。

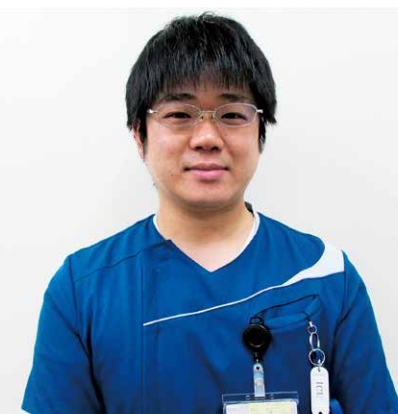


「臨床実践研修に参加して」

一般財団法人 潤和リハビリテーション振興財団 潤和会記念病院 田 中 友 康 さん（平成20年度卒業）

私は潤和会記念病院のICUに勤務しており、呼吸・循環動態の不安定な患者や外科や脳外科、泌尿器科など術直後の患者の超急性期看護を行っています。看護師11年目となり、新人、後輩指導に勉強の毎日です。

先日、大学で行われた臨床実践研修に参加し、嘔気がある患者の点滴介助の場面を学生とともに模擬体験しました。点滴の準備や介助などの技術面に集中し、介助中多くの学生が無言でしたが、患者役の動きや表情の変化に気が付くとすぐに声をかけ、背中をさするなどの行動ができていて、未来の優しい看護師が育っているなと思いました。一方で、退室時のナースコールなど物品の位置調整や声のかけ方は学生1人1人に違いがありました。臨床では対応している間に加え、看護師がいないときの患者の思いや行動のことを考えてあげることが安心感に繋がります。看護には正解がないからこそ、これからも患者の立場に立ち、安心感を与える看護師を育成していきたいです。



サークル紹介

和太鼓サークル

和太鼓サークル部長 3年 堀 雅輝さん

私たち和太鼓サークル「いちよう太鼓」は現在総勢9名で活動しています。毎週月曜日に活動を行っており、自分たちが基本的に持ち曲としている「初音」、「暁」、「いちよう」、「華響」を練習しています。和太鼓のコンクールへの参加はしていませんが、新入生オリエンテーションの際の演奏や、大学祭での演奏、地域のお祭りや、病院でのボランティア演奏を行っています。サークルメンバーのほとんどが初心者でサークルにはいますが、「和太鼓一座・天響」さんにご指導を頂きながらの練習もあるのでしっかりと技術を身につけることが出来ています。現在は少人数になってはいますが、その分仲良く和気あいあいと活動を行えています。他大学との連携もできないかを検討しながら活動をしています。サークルとして自分たちのやりたいことをしながら、ボランティアも行えるという素晴らしいサークルなのでこれからもサークルで一丸となって皆様に素晴らしい演奏を聞いていただけるように練習に励んで行こうと思います。



夏祭りでの演奏の様子

ダンスサークル

ダンスサークル部長 3年 甲斐優香さん

私たちは、ダンスを通して心を通わせながら楽しく活動しています。部員はほとんどがダンス未経験からのスタートでしたが、私たちなりのペースで全員が楽しめるよう工夫をしながら、多くのジャンルに挑戦しています。新入生オリエンテーションや看護大・他大学の大学祭、クリスマスコンサート、卒業イベントなど、ステージで踊る機会が盛りだくさんですが、勉強との両立を図りながら活動しているのでとても充実した生活を送っています。ダンスを通して私たち自身が楽しむだけでなく、見ている人までそれが伝わり楽しい気持ちになってもらえたらと考えています。また、夏にはサークル部員でキャンプに行き、学年の垣根を越えて親睦を深めています。週に2回定期的に活動しているので、継続的な身体運動にも繋がりますし、ストレス発散・気分転換等精神的にもいい影響を与えてくれています。

ダンスサークル一同、多くの人を楽しめる気持ちにできるよう、他にも踊る機会があれば参加したいと考えています。いつでもお声掛けください！



昨年度の大学祭でのステージの様子